

名倉の古墳考

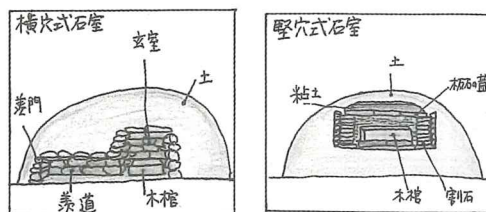
名倉平に幾つもの古墳があるのに、「なぜ良く似た地形の津具には一基もないのか」と郷土館長の渡邊氏に問われ、あれこれ考えを廻らしてみました。津具一帯から古墳時代遺物がほとんど出土しないのに対して、名倉平の四十五ヶ所余りから多くの遺物が出土し採集されている。

古墳も十七基名倉平の沖積地周辺の山麓や丘陵頂部に造られた。オトシ山一号墳と二号墳は畑に開墾され完全に姿を消したので現在あるのは十五基である。その内で丸根古墳は昭和十三年に調査をうけており、屋木下古墳は昭和四十一年に土取り作業中に発見され、急きよ調査が行われた。石室内部や内部に残されていた副葬品等が詳しく『設楽町誌』に記載されています。

丸根古墳の右片袖型横穴式石室や屋木下古墳の竪穴式石室豊橋市発掘調査員の岩原剛学去員は無袖型横穴式石室と『三河考古』に報告は副葬品等出土遺物の須恵器から鑑み古墳時代の後期(六世紀〜七世紀)の小円墳である。

三世紀の終わりから畿内地方で突如出現し、四世紀には日本全域に広がり七世紀の中頃まで

続く古墳造り。



れています。

私は今までに諸所の古墳を見て廻っていますが、豊川流域では五世紀後半に東三河最大の九十六メートルの船山古墳(豊川)がある。ここから円筒埴輪が沢山出土している。愛知県下最大の石室を持った馬越長火塚古墳(豊橋)には六世紀半頃の横穴式石室に金銅製杏葉(きょうよう)の見事な馬具が副葬されていた。新城市内にも断上十号墳など前方後円墳や沢山の円墳が造られたが、その上流域には小円墳すら見られない。

矢作川下流域では五世紀まで大型古墳が造られたが、それ

さて津具と名倉は水系が違います。そこで矢作川、豊川、天竜川地域流域の古墳分布を見てみたい。三下流域にも四世紀末から大型古墳が造ら

後は豊川下流域と違い円墳になる。豊田の大塚古墳は横穴式石室の二段円墳で、出土した装飾須恵器の数々は国指定文化財になつてい。上流の足助には小古墳がわずか一基、稲武も同様であるが、その支流の名倉には十七基である。

天竜川下流域にもやはり四世紀末になると銚子塚古墳のような前方後円墳が幾つも造られた。上流の伊那盆地には五世紀から六世紀に二十基にも及ぶ大型前方後円墳が集中している。御猿堂古墳などからの鏡や金銅製の装飾馬具等の副葬品には驚かされます。伊那盆地からは装飾馬具を身につけた馬も墓も出土している。ヤマト政権との繋がりを強く感じます。中流の流域である東栄町には五基の小古墳がありますから小集落が築かれていたと思われませんが、津具の地へ移動しなかつたのでしょうか。

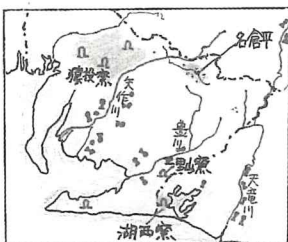
来て、名倉の良き地を見つけ、集落を形成し、その中から有力な家長層が生まれた。その支配者は流域の違う津具へは進出を考えなかつた。あるいは名倉平を拠点にし、力の範囲を津具、豊根、富山にまで及ぼしていたのかもしれない。

七百年後の南北朝時代に名倉に居を構えた足助荘の代官の名倉氏が周囲の村々を治めたように。

名倉の二古墳から出土した須恵器に注目すると、蓋坏や埴瓶は猿投窯の須恵器である。猿投窯は矢作川中流の西域である。屋木下古墳には半世紀後に湖西窯の須恵器が追葬された。古墳が造られた当初は矢作川から、半世紀後には湖西からも人の交流や文化が取り入れられたことがわかる。

名倉の様な山間部にも支配者は横穴式石室という新たな墓制文化を取り入れ、死後も集落の民を見下ろして威厳を保とうとしたのでしよう。

勝手に廻りましたが、皆様のご意見をご教示いただければ幸いです。いずれにしても石材で造られた古墳の石室は千五百年過ぎた今も残り、副葬されていた品々の遺物から古代人の心のありかを想像することができ



私見ですが、稲作に適した新たな開墾の地を求めて矢作川の上流上流へと進み

ます。いにしえに思いを廻らしてみませんか。

【参考文献】

『愛知県史』『長野県史』

(設楽町文化財保護審議会委員

塚本 洋子)